

流水

岩上町 山口 俊一郎

「そんなら、行くぞ」と言った時、急に泣き出した祖母と慌てて祖母をなだめる祖父の姿を、正二は今でもはっきりと覚えてる。

中風で半身不随の祖母は、ハマ床に座り、孫の正二が集団就職で上京するのを見送っていた。

学校の成績は良く、先生も進学を強く勧めたが、兄一人、姉三人で、父母は炭焼きや他人の田畑の手伝いをしている家計では食べていくのが精いっぱいであった。

正二にも、自分が早く中学を卒業して他の兄妹同様、働きに出ることを両親が望んでいることがよく分かっていった。

昭和二十七年三月、白峰中学を卒業した早瀬正二は、白峰村の大淵から集団就職で東京へ行くことになった。

三年生の担任・後藤武松先生が、金沢駅まで付き添ってくれ

た。白峰中学からは、東京へは男女五名であり、やはり関西方面は十二名と多かった。

金沢駅には、集団就職で東京圏へ行く生徒が大勢いた。

先生が、「いいか、気を付けて行くんやぞ。明日の朝、上野駅には会社の人を迎えに来とるし心配いらんぞ」

正二は後藤先生が好きだった。背が高くガッチリしていて声もでかいが、温かみがあり生徒に好かれていた。大学を出て金沢の中学にいたが、校長とケンカをして白峰中学へ来たとのことだった。

先生は生徒五名に、パンと牛乳を買ってくれた。正二は、それがアンパンか何だったか忘れたが、それまでほとんど飲んだことがなかった牛乳のニオイは今もはっきりと覚えている。

別れ際に先生が、「正二、勉強は忘れるな。社長にも頼んであ

るから夜学へやってもらえ。ガンバレ、お前ならやれる」と言った言葉は、今でも人生の励みになっている。

翌早朝、上野駅で友と別れ、迎えに来ていた人に案内されて歩いて十五分位の所にある「田島製パン店」へ着いた。ここが正二の働く場所である。

早朝とはいえ、五、六名が仕事の真つ最中という風であった。相当朝早くから仕事に取りかかっているようである。

社長の田島好夫さんが、東北弁の抜け切らない声で、「オーイ、皆ちよつと手を休めてくれ。これが今日からウチで働く石川県から来た早瀬君だ。名前は正二、皆ショージと呼んでくれ」

次いで順に自己紹介していく中で突然一人が、「石川県ってどこにあるの」と聞く。

正二が口ごもっていると社長が、「えーつと、まあ東京と反対の方だ。そうだ、佐渡島の方だな」と言つて笑つた。

「さーて、手を取らせたな、仕事に戻つてくれ。あつ正二、朝メシ食つてないんじゃないか。そこにパンとバターがあるから。パンならいくらでもあるからな。ハハハハハ」と社長は屈託がない。正二は、カーテンで仕切られた片すみで、社長からトースターの使い方を習い、紅茶を入れてもらつて東京での初めての朝食を食べた。生まれて初めてのトーストにバター、そして紅茶。その味は今でも忘れられない。

「早速だが、少し洗いでもしてみるか」

正二は社長に連れられて洗い場へ行き、パン作り器具を洗うこととした。いろんな器具があり、それにはどれもメリケン粉が凝

り固まっていた。社長が丁寧に教えてくれる。正二は根気よく働いた。白峰時代の厳しい農林業の手伝いを思えば、仕事は苦にならなかつた。建物の中で、水道から出るきれいな水での作業はむしろ楽しいくらいだった。働いているうちに、自分が今東京にいるんだ、という実感が初めて湧いてきた。

「お父ちゃん、お弁当ちょうだい」

全く突然の少女の声に、正二はびつくりした。

社長が、「アイヨ、これがおめえの分、これが友達の分だ。あつ好子、石川県から来た正二、早瀬正二だ。今日からウチで働いてもらうんだよ」

「よろしくお願いします。ジャー行つて来まーす」

「ハハハ、あれが娘の好子だ。よろしくな。一人っ子だから我儘だが、近くの中学の二年生になったばかりで、春休み中でもテニスの練習で学校へ行くんだ。友達も楽しみにしているとか言つて、時々弁当にサンドイッチを頼まれるんだよ。しょうがねえよ」と言いつつ社長は嬉しそうだった。

朝早くから働いている分、昼ゴハンも早かつた。十一時頃になると、「昼メシにすつか」と言う社長の一言により、六名の従業員が作業場の真ん中の大テーブルに座つた。

「サーサー、今日はチャーハンだよ。いっぱい食つてくれよ」という大声と共に、熱々のチャーハンが運ばれてくる。

社長夫人のとし子さんだ。声が大きく一見ガサツで決して美人ではないが、一種の気品がある。

背は中位だが、体いっぱいエネルギーが詰まっているような

人だ。

「正二、遠慮なく食えよ。お代わりするか」社長は優しい。先輩たちの豪快な食べっぷりに正二は圧倒されていた。

食後は、作業室の片隅でカーテンを引いて横になる者、又将棋を指している者、各自一時間位休んで午後の三時頃まで働いて一日の仕事は終わる。

その日、夕方五時から、近所の都寿司の二階で正二の歓迎会をしてくれた。

皆は仕事中のムツとした緊張感とは打って変わって、ワイワイガヤガヤ、社長も一緒に騒いでいる。

寿司がうまかった。正二は大淵の人々にも食べさせてやりたい、と思った。

「では、そろそろお開きとするか。あつ、スギ、正二のことこれから頼むよ」

阿部杉三。秋田県出身で正二より三歳年上である。

今日一日の付き合いだが、正二には阿部さんが考え深く、全てに工夫して働いていると思われた。阿部さんは足が不自由だ。後で分かったことだが三歳の時小児麻痺を患い、左足が不自由になったとのことである。

「正二、行くか」阿部さんに連れられて、会社のすぐ近くのアパート・公園荘へ行く。

「ここだ。二階の十一号室でこれから一緒に暮らすことになるが、よろしくな」

「いいか見てろ。片足が不自由だともう一方がものすごく強くな

るんだ。この階段を右足一本で上るからな」酔いも手伝って、阿部さんは右足一本で階段をジャンプして上っていく。その音が響き、むしろ正二がハラハラしていると上り切った阿部さんが、「どうだ正二、これが東北人の力だ」と言って笑った。

阿部さんの一世一代のユーモアが、正二には嬉しかった。

部屋は六畳で両方に押入れがある。二人部屋用に作られている。

正二は会社で準備してくれた布団に横たわる。長い一日だった。いろんな音と光の入ってくる部屋で、初めて正二は深く息を吸い込んだ。

すぐく疲れているが寝付けない。それを察してか、阿部さんがいろんな話をしてくれた。

田島社長は、山形県の本奥の出身であり、中学を卒業して銀座の森村製パン店で修業したとのこと。十年程働いて、上野で店を出したこと。東京うまれの奥さんとし子さんは、森村製パン店の遠縁の娘さんで、事務の仕事をしていて社長と結婚したこと。

パンの他に少し菓子も作っているが、小売店へ出している一方、東都大学の生協へも出していること。ここ二、三年の人気商品はパンではなく小型羊羹であり、それは「キリン羊羹」と名付けた細長く短めのもので、アズキの中へメリケン粉を混ぜ、砂糖の代わりにサツカリンを用いて値段を安くしたところ爆発的に売れ、今では上野駅の売店にも置かせてもらっていること。パンではないが、「背に腹は代えられない」と社長も言っていること。

「アレ、正二、正二、もう寝たのか」

「正二、起きろ」と言う阿部さんの声に正二は飛び起きた。三時だ。さしもの東京もシーンと静まり返っている。共同洗面所でそつと顔を洗う。

会社には煌々と電気がともっている。

朝食は奥さん手作りのオニギリと保温器に入ったミソ汁、佃煮が用意されている。先輩達は流れるように作業に入っていく。正二はメリケン粉の捏ねを手伝う。

時に叱られ怒鳴られることがあり、東京弁はきつく感じることもあったが、大淵で農林業を厳しく教え込まれていた経験が役立つ、その辺の呼吸はさして抵抗がなかった。

上野公園の桜の蕾が膨らむのと並行して、正二は仕事と生活にも慣れていった。

花見時の多忙も終わり、ゴールデンウィークを控えていたある日、社長が、「正二、外回りに行ってみるか。先ずは場所も分かりやすい東都大学へ行ってくれ。あそこは値切られたり、ややこしい話はないから届けるだけでいいんだ。自転車は気をつけるよ」社長が書いてくれた地図を頼りに動物園の横を通って、慣れない坂道を大きめの自転車で商品を満載して行く。やがて他を圧する大きな建物が見えてくる。

これがあの東都大学か。

学問に興味がある正二は、体が震えるような感動を覚えた。大学に近づくにつれ、道々出会う学生らしき人々。自分と五く六歳しか年の違わない、生まれて初めて見る人々。日本にはこんな人もいるんだ。しかも集団で。

裏門から構内へ入る。金沢のお寺とは全く違う、今まで見たこともない厳かな建物。大勢の学生。そしてこれまで聞いたことのないスピーディーで要約された話し声。

「生協」というカンバンを見当に、ようやく目的地へ着く。そこには、人間と生活の匂いがした。懐かしい雑草も生えていた。社長に言われた通り裏手から恐る恐るドアを開けて中へ入る。カウンターを前に、三く四名の男女が制服を着て立っていた。チラリとこちらを見た女の人を見て、正二はとつさに金沢で見た能面を思い出した。

「アノー、田島製パンです。パンを持ってきました」すぐに背の高い男の人が、「アツ、田島さん。ごくろうさん。こつちへ持って来て」と言いつつ、自分も外へ出て運んでくれた。

「僕は有村秀之です。そうか、石川県なら雪が多いだろう。やはり君は鹿児島出身の僕より色が白いな。まあ、今後ともよろしく」と、自分から話しかけてくれた。

鹿児島、九州、石川、東都大学、正二の頭の中で何かが急に広がった。

たまに女性の学生らしき人も出会う。女性もいるんか。正二はびつくりした。その話し声、目、口元から、何か違うものが放たれているような気がした。

軽くなった自転車を引いて帰る。大分落ち着いてきた正二の目に、大きな立てカンバンが目につく。独特の書体で赤い大きな字だ。

「大学の封建制を打破せよ」「体制の走狗 東都大学を粉碎せよ」

「安保反対」

正二には何のことか、さっぱり分からなかった。

大きな感動とシヨックを胸に、会社へ帰った。

一日の疲れと共にアパートへ帰る。

夕食は原則自炊だ。今日の当番は阿部さんだ。

「今日は太刀魚だ。帰り魚辰の前を通つたら、いいのが入つてた」

元々海の魚なんてあまり食べずに育つた正二には、太刀魚は初めて魚だった。

六月に入り、正二もかなり仕事にも慣れてきたある日、社長が、

「正二、お前も大分落ち着いてきた風だな。どうだ。そろそろ夜学へ行ってみるか。お前の先生からも頼まれているんだ。前にもここから夜間へ行き立派に卒業したヤツもいる。辛いがガンバれるか」

正二は嬉しかった。自分から言い出せなかったが、向学心は高まる一方だった。

近くの都立高校の定時制へ七月一日から入学させてもらえた。

社長の計らいで、仕事も朝の七時から、午後は三時までになった。

いくらでも寝られる若い時、寝不足で辛い時もあったが、正二は止めようと思つたことは一ぺんもなかった。

故郷大淵の人々への思い、自分と同じくガンバッテいる学友達、そして熱心な先生方、それにも増して正二に力を与えてくれたのは自身の成績の良さだった。特に理数系に強く、皆が一目置いていた。

パンや菓子は数が大切だ。正二は一ぺん数に遭遇すると、それが種類ごとに脳にへばりつくように記憶された。いつしか周りからも、その才能を重宝がられるようになっていった。しかし、時に先輩達から勉強していることと、優遇されていることにイヤミを言われたり、意地悪をされることがあったが、正二の学問への強い意志がそれに打ち勝つた。

そして、何よりも同室の阿部さんの無言の協力が有難かった。

正二が勉強している傍らで、早番の阿部さんが目にタオルで目隠しをして眠ってくれた。仕事の面でも、それとなくカバーしてくれた。

自炊当番も、いつの間にか器用な阿部さんの専任となつていった。

十二月二十九日夜、会社の忘年会が都寿司で行われた。無理に飲まされた酒に少しフラフラしていると、社長が、「オイ正二、ウチのバカ娘も来年は中学三年、高校受験の年だ。本人は勉強もしないくせに、高校へ行きたがつてる。何でも、特に数学が分からないとか言ってるから、たまに見てやってくれないか」

翌日には先輩達は皆故郷へ帰って行ったが、正二は残って作業場の跡片付けや正月のお飾りをしていた。実家へは東京の海苔とキリン羊羹を送っておいた。

昼頃社長の奥さんが、「正二、こつちで皆と一緒に昼ごはん食べるよ。おいで」

居間には社長夫妻と好子さんが待っていた。「忙しいから店屋

物にしたよ」と奥さん。正二の好きなカツ丼だ。東京の丼物はカツとして汁が少なく、正二の好物の一つだった。

食べ終わってお茶を飲んでいると社長が、「正二、ちよつと好子の勉強を見てやってくれないか」と言っつて自ら丼を片付け、飯台の上をフキンで拭いた。

娘の好子が、「今からー？」とシブシブ数学の練習問題を持って来た。

中二の数学は、正二には苦も無く理解出来た。

初めは乗り気でなかった好子も、正二の物静かでの確な教え方に次第に身を乗り出して聞いている。見守る両親も娘の変化に満足そうだった。

「正二、お前本当に頭いいんだな。好子、これからも教えてもらえよ。正二、頼むぞ」と、社長も嬉しそうだった。

その後、正二と同じ高校に入学してからも、好子は正二に勉強を見てもらうことが続いた。

初めの頃は、東京の女子学生の活発さに正二は時としてドギマギすることはあったが、二人はやがて兄妹のようになっていった。

六十年の間には、いろんなことがあった。

結局正二と好子は結婚した。正二が二十五歳、好子二十三歳の時だった。そして翌年、息子の藤夫が生まれた。生まれた時が上野公園の藤の花がきれいな六月だった、ということ皆で決めた名前だった。その藤夫も、今では東都大学の二年生になっている。将来は建築学の道へ進むとのことである。

藤夫が東都大学に合格した時は、家族一同手を取り合っつて喜んだ。

一週間に二〜三度、正二はほとんど東都大学担当者のような形になり、商品をお届けしてきた。

一つには、正二自身が大学へ行くのが嫌いでないことと、大学生協側でも正二に話しやすい、ということの為であった。しかし正二には、有村さんが今も生協で働いているというのが一つの驚きである。今では全国大学生協連盟の会長になっているというものの、少なくとも東都大学を出て自分のようなパン屋を相手に物品を扱っているという人生が、正二には不思議であった。

長い間通っている内に、正二なりにいろんなことを思うようになってきた。

折角東都大学へ入ったのに、何の不満があるのだろうか。

「大学の封建制を打破せよ」

聞くところによると、大学教授になる為には、徒弟制度のように上司の教授に仕え、その研究内容や考え方までもコントロールされ、ひいては日本の学問に自由な発展性がなくなるとか。

「体制の走狗 東都大学を粉碎せよ」

東都大学は、社会制度の改善により国民に幸せをもたらす努力を怠り、自己の立身出世と幸福のみの為、国のリーダーにすり寄っつていくような人間ばかりを世に送り出しているとか。

「安保反対」

日米安保条約により日本はアメリカの手下となり、アメリカの戦争に荷担し、やがては第二次大戦の過ちを繰り返すことになる

とか。

正二は、これらの考え方にも一理ある、とは思いますが、しかしそれは物事の悪いと思う一部のみを切り取ってそれによって全体を否定する、つまり自説を通す為の身勝手さと視野の狭さをも感じました。

何れにしても、正二は自分が夢にまで見た大学生にも悩みは深く、自分や大淵の人々の人生と比べてみると、人間の幸せとは一体何なのだろうか、と考える時もあった。

とはいっても、息子の藤夫が東都大学生である、ということは正二には何にも代えがたい大きな喜びであり、それによって東都大学が一層身近に感じられた。

会社は人の良すぎるような田島社長を中心に、今でも温かい家族的な雰囲気のままであり、従業員も十名になっていた。

いつの頃からか、正二は奥さんに代わって経理も見るようになっていた。複式簿記も通信教育でマスターした。

妻の好子も、母親に代わって家事をこなし、会社を側面からしっかり支えていた。

しかし、会社を取り巻く環境は、目まぐるしく変わっていった。正二の入社した頃は、「作れば売れる」質より量の時代であり、菓子業界にも次第に統合の波が押し寄せてきた。全国にあった無数のメーカーも次第に減り、大会社の商圏が拡大していった。

そして海外からの輸入。人々の嗜好の多様化。

田島製パン店も、そんな中であって、その存在価値が次第に小

さくなっていくのを正二は肌で感じていた。

かつての人気商品であったキリン羊羹もいつの間にか姿を消し、アンパン・クリームパン等も大メーカーに押され気味であった。

しかし、人情家の社長は、十名の従業員を抱え、昔からの馴染みの客の要望を断り切れず手作りにこだわっていた。

そんな中、昭和五十九年の夏休み明けの九月、秋めいてきた銀杏並木を通って商品を持って行った正二に有村さんが、「明日からしばらく品物はいらぬ。ストライキに入るかも知れん」とのこと。ストライキ？ しかも学生が？

正二は全く分からなかった。学生が授業を受けることを拒否する。そしてストライキをする。

その理由が、大学の封建制を打破する為、とのこと。正二には、この二つがどうしても結びつかなかった。

しかし、正二はこうも思った。大学生であるからこそ、社会体制とは盤石のものではなく、それは改善出来るものであると認識し、改革することが自分達の使命であると思っっているのかもしれない、と。

結局ストライキは一週間程で終わったが、正二には忘れられない出来事となった。

それは木枯らしのように突然やってきた。

その年の十一月下旬、藤夫が突然大学を止めると言い出した。

全く知らなかったが、三年生の藤夫がストライキのリーダー格の一人であった、ということだった。

青天の霹靂、とはこのことだろう。勿論家族全員、従業員までも揃って大反対した。

藤夫の存在は、皆の密かな誇りであったのに。

何べん藤夫と激論を交わしただろう。正二の気持ちは驚きから、激しい怒りへ変わっていった。

しかし藤夫は最後まで、「あんな古い体質の大学へ行く気はない」と言う一点張りであった。

師走も押し詰まっていた頃、ある日フイに藤夫の姿が見えなくなった。

最早探す気力も失せた家族達は、なるように任せていた。

会社を取り巻く環境は次第に厳しくなり、藤夫は行方不明、その年の正月の暗さを正二は生涯忘れなかった。

昭和六十年六月、その年も上野公園に藤の花が満開になった。

正二は東都大学へ行く役を降りた。学生の姿を見るのが辛かった。

そんなある日、フラリと藤夫が会社に現れた。

皆の驚きと安堵。正二の怒りは藤夫の顔を見た瞬間、少し治まった。以前と比べて、落ち着いて、涼やかな顔になっていた。

「半年もの間、スミマセンでした。よろしくお願いします」

聞けば数日前から、阿部さんの部屋で一緒にくらししているとのこと。「なぜ黙っていた」と阿部さんは皆に叱られていたが、ともかく全員がホツとしたのは事実だった。

次の日から、藤夫は見様見真似で会社の仕事を手伝い、午後になると近くの図書館へ行くようになった。

阿部さんの話によると、藤夫は半年京都のお寺へ住み込んでいたこと、そして今は「会社の経営」とかいう本を読んでいる、とのことであった。

それなりに小康状態を保っていた会社も、二年後の昭和六十二年の暮れ、とうとう二進も三進も行かなくなった。売り上げの減少、十人という従業員の多さとその住居費の他、昼食や忘年会・花見をも会社で負担してきたこと等々。

社長夫人の人情味と温かさのあふれたやり方が、完全に行き詰ってしまった。

次の年四月、従業員が賃金の遅延に反発してストライキに入った。知らない人や大学生までもがストライキの応援に来た。七十四歳の社長には人生で初の経験であり、全く落ち込み廃人のように黙りこくってしまった。

この時、敢然と立ち上がったのが藤夫であった。人が変わったように、時には哀願し、時には脅し、又理論に訴えるかと思えば人情話に持つていき、一步も引かず堂々と渡り合った。

藤夫が次々と打ち出す改革は、父の正二には時には冷酷、時には名案と映ったが、何れにしても自分達の時代が確実に終わったことを痛感した。

従業員も半分の五名にまで減らした。退社の五名は正二が大学生協の有村さんに頼み、東京圏の会社に夫々引き取ってもらった。

皆、これまでの田島製パン店より大きなメーカーへ行くことが出来た。

退職金も、どこでどうして借金出来たのか正二には分からなかったが、世間並に近いものを払えた。

又、従業員のパート代は完全自己負担に、昼食サービスも止め各自で準備すること、忘年会・花見も一部自己負担に、そして出勤簿もタイムレコーダーにした。

一方では、社会保険や退職金の積立てに全員が加入すること等々、次々と改革された。

五名の削減に代わり、区役所の要望を受け入れ、身体障害者の女性一名が採用された。品川由美子さん、二十歳で両方の耳が不自由だった。

さらに大きな変化は仕事のやり方だった。

早速大手メーカー山上製パンの系列に入り、その依頼に合った製品を作ること、大型機械を導入し捏ねから焼き上げまでをなるべく機械化すること、味の均一性を図ること等々。一個一個の手作りから、画一的製品へと大きく変化された。

大手メーカーや区役所等と連携し、曲がりなりにとも会社は倒れることなく前へ進んでいった。

社長夫妻には、昔の会社への郷愁は断ち難かったが、時代の変化には逆らえなかった。

藤夫はさらに考えていた。

これで一応は倒産は免れた。このまま坦々といけば、最低限の

生活はしていけるだろう。しかし夢がない。何か、かつてのキリン羊羹のようなものがないか。試行錯誤の末、ある時フト思い付き、東都大学の近くでもあり「天才パン」と名付け、角帽の型をしたアンパン大のパンを作った。自身は何の変哲もない、中にクルミの割ったのを入れたパンである。

しかしこれが売れた。「一つで秀才、二つで天才、三つ食べればやめられない」という宣伝文句が当たり、特に受験生を持つ親達への一種の「おまじない」のようなものになっていった。

食料や品物が豊富になってくると、不可欠な食にも遊び心が入ってくる。しかしこのブームも長くて十年だろうな、と藤夫は思っている。

こうして田島製パン店は勢いが増してきた。

社長となった藤夫は、家族の猛反対を押し切り、耳の不自由な由美子さんと結婚し、子供二人にも恵まれた。上の男の子は埼玉の私立大学二年生でラグビーを、下の女の子は都内の私立女子高校三年生でおしゃれにしか興味がなく、実家のパンは美味しくないと云うのが口癖である。

平成二十四年、正二もとうとう七十五歳になった。

「好子、大淵へ帰ろうかと思っている。ついてくるか」

正二の実家は、兄は金沢で所帯を持った息子の所へ行き空き家となつている。兄から、

「取り壊そうと思うが」と連絡を受けた正二は、「オレが入ってもいいか」と兄妹の了解をもらい住むこととなった。

「チョットの間なら行つてあげてもいいよ」と言っていた妻の好子も、五年間ズーと大淵に住んでいる。

少しばかりの畑を耕し、正二は過疎地となった大淵の町内会長や老人クラブの役員をしている。誰も代わりがないので、死ぬまで役員を止められないかも知れない。

十月末の小春日和、畑仕事に疲れた正二は切株に座り肉厚の山々を見る。

手取川へ向かつて、眼下に尾添川が白く光っている。この川の水も、かつての自分と同じく大海へ向かい、そして雪となって白山に帰つて来るのだろう。

人生って何だろう。

人間の幸せって何だろう。

かつて燃えるように憧れ、高校・大学さえ出れば人生全てがうまくいくと思つたが、そうではない、ということを見せてくれたのは有村さんのいた東都大学と息子の藤夫かもしれない。

人間って不幸な生き物なのか。幸せと感ずる時間には、すぐに飽きてしまうのか。だから文化や改革が生まれるのか。動物は食と住さえあれば、停止するのに比べると。

「ともかく、この世に人間を永続的に幸せにしてくれるものは何もない。それは自分の心の中にある」

正二は林西寺りんさいじの住職をしている白峰中学の同級生の言葉を思い出しつつ、妻の待つ家へ帰る。

ズーと独身で、今もあのアパートにいる阿部さんが送つてくれた懐かしい東京の佃煮で、今夜も菊姫を飲もう。

